

農 × 地域シンポジウム 2025

未来を耕す

～根をはり つながる 道づくり～



取り組みと成果のまとめ

2025年3月

特定非営利活動法人つむぎ・農×地域シンポジウム実行委員会

はじめに

2025年2月15日(土)、京都府南丹市にて3年目、3度目となる「農×地域シンポジウム2025 未来を耕す～根をはり 耕す 道づくり～」を開催しました。このシンポジウムは、「農」を切り口に地域住民や移住を考えている人などが課題や経験を共有し、多様な在り方を認識することで、今後の持続可能な「農と地域」の姿と一緒に模索していくためのきっかけの場となることを目指しています。

南丹市に限らず、日本各地の中山間地では、長い年月をかけて培われてきた農の営みや里山、農村環境を維持していくことが難しくなっています。高齢化や少子化、都市部への人口流出などによる担い手の急激な減少が大きな要因ですが、中山間地における「持続可能」な地域の在り方を考えれば考えるほど、複雑に問題がからみあい、それらを切り分けて個別に取り組んでいては、持続できる姿にたどり着けないということがわかります。

移住者や関係人口を含めた多様で幅の広い“担い手”を増やしていくこと、地域の中でできることを模索していくこと、分野をこえて協力しあうこと、それらに必要なサポートが適切に提供されることなど、必要

とされる取り組みや体制を構築しなければなりません。そしてそれを長期的に機能させていくためには、行政や関連機関、団体だけではなく、個々が課題をしっかりと認識し、協力しあって動き出すことができる土台を作ることが必要です。

シンポジウムのタイトル「未来を耕す」、そして以下の呼びかけ文には、多様な考え、経験、立場を持つ人たちが、多様なビジョンを持ち合って集い、対話を通して足元から豊かな地域を未来に向けて作っていく、そんなはじまりの場になっていくよう思いをこめました。

シンポジウム当日は、主催者の予想を大幅に超え、南丹市内と近隣の他府県を含め、300人を超える皆様にご来場いただきました。登壇者の話に真剣に耳を傾ける姿、初めて会う方と積極的に話をする姿、うなずきながら楽しそうに会話をする姿など、会場が「未来を耕す」人々であふれかえっていました。

この冊子を通してシンポジウムを振り返ると共に、あの場でつむがれた内容を皆さまと共有していくことで、また未来へをつながる道とともに耕し、種をまき、根をはっていくことができるよう、心より願っています。

未来を耕す

豊かな森、田畑、里山の暮らしが息づくこの南丹。

5年後、10年後、そしてその先、どんな風景にしていきたいですか。

地域の人も、移り住む人も、訪れる人たちも、

春を待つこの日、農と地域について一緒に考えてみませんか。



目次

はじめに

1. 農×地域シンポジウム開催の経緯 P4

2. 南丹市の関連情報 P4

3. 開催プログラム P5

4. 登壇者プロフィール P6

ご参加のみなさん P7

5. 開催の詳細と内容のまとめ

ドキュメンタリー映画上映「百姓の百の声」 P8

全体会パネルディスカッション

「根をはり つながる 道づくり」 P10

分科会 ①「農と地域のこれから」 P12

②「百姓のナマの声」 P14

6. 登壇者からの声 P16

7. ファシリテーターから P18

8. 学生からの声 P19

9. つながるマルシェ P20

10. たねの交換会 P21

11. アンケート集計 P21

終わりに P25

関係者の紹介 P25

12. チラシ P26



主催：特定非営利活動法人つむぎ・農×地域シンポジウム実行委員会

協賛：明治国際医療大学

後援：南丹市、京都新聞、コミュニティ・バンク京信

この事業は、「令和6年度京都府地域交響プロジェクト交付金」を活用しています。

この冊子および農×地域シンポジウムに関するお問合せ

特定非営利活動法人 つむぎ

E-mail: tsumugi.nantan@gmail.com HP: <https://tsumugi-kyoto.net/>

※この冊子のPDFデータ版は上記HPよりダウンロードできます。

1. 農×地域シンポジウム開催の経緯

「農×地域シンポジウム 未来を耕す」は、農の切り口から中山間地が抱える課題を考える場を作ろうと、2022年、地域の課題に取り組む有志が集まったことが始まりです。半年以上の準備期間をかけて、第1回目のシンポジウムを2023年2月に開催しました。

このシンポジウムは、農と地域の課題に取り組む団体、農業者を含む地域住民、行政、そして農×移住に関心のある移住希望者などの人々が出会い、お互いを知り、課題を共有することで未来へ向けた取り組みのきっかけの場となることをねらいとしました。

1回目のシンポジウム(2023年2月18日)は「これからの農と地域を考える」とし、地域住民と移住者など外からきて地域にかかわる人たちがどのようにかかわっていけるのかということを中心に、龍谷大学経済学部西川芳昭教授に『風の人』『土の人』の視点を取り入れた農と地域の未来に関する基調講演をいただき、事例発表に加えて、南丹市の農業、森林と農村、オーガニック農業、農×移住の4テーマでの分科会を設けました。南丹市内外から関係者を含め、130名以上の方にご参加いただき、1日をかけてあちこちで熱心な意見交換が生まれていました。

2回目(2024年1~3月、計3回の連続開催)は「種まきミーティング」とし、「地域の担い手はどうやって育成していくのか」「多様な農の在り方が根付いていくには何が必要なのか」「移住者

を地域でどのように受け入れていくのか」かなどについて、地元の農家の方や、非農家から農家になった方にご登壇いただきました。南丹市の住民、農家、行政関係者、取り組み団体等を中心に各回40名ほどの方々にお集まりいただき、多様な事例の紹介や、グループでの話し合いなどを通して、理解を深め、新たなつながりやアイデアを持ち帰る場となりました。

3回目の開催となる今回のシンポジウムは、このシンポジウムの開催地となっている南丹市日吉町にある明治国際医療大学に新たに農学系新学部が開設されるというニュースと、ドキュメンタリー映画「百姓の百の声」を上映したいということ、また、より多くの方が地域の農業や生産者の方たちと出会い、交流する場としてマルシェも開催しようというアイデアを合わせて1日のプログラムを構成しました。

過去のシンポジウムにお集まりいただいた方や、今回のシンポジウムでマルシェのみにご来場いただいた方を合わせると、300人以上の方にご参加いただいたことから、農、地域、食への関心の高さと、何かできることをしていきたいという思いを持つ方が本当に多くおられるということが示された場でもあるといえます。



第1回農×地域シンポジウムのまとめ冊子はこちらからダウンロードできます。
(つむぎHP・PDF)



京都府南丹市は、2006年に4町(美山、日吉、園部、八木)が合併し、東京23区とほぼ同じ面積である約616km²の広大な地域に約3万人が住んでいます。(2025年3月現在2万9,426人。20年前の合併時人口は同月3万6,304人/出典:南丹市HP)

豊かな森や里山の環境が維持されている農村地域も多くあり、街のエリアは京都市内からのアクセスが良いという利点がある一方、全体では高齢化率が36.4%、特に八木、日吉、美山では高齢化率が40%を超えるなど、人口減少もあわさって様々な課題にも直面しています。(2023年度数値/出典:南丹市農業の概要:令和6年度南丹市農業推進課※)

「農」の観点からみると、南丹市の北部に位置する美山町と日吉町、そして、市役所所在地である園部町の西部の農地は典型的な中山間地にあり、大規模な圃場整備ができないエリアであるため、農の担い手が急激に減っている地域でもあります。これらの地域では、「農」だけでなく集落機能全般の担い手が減少しており、作業に携わることで維持されてきた森林や農地を含む里山環境の土台である農村が今後どうなっていくのか、と危惧を抱かせる状況になっています。

また、シカやイノシシなどの野生動物による獣害も増え続けており、さらに「農」の営みの維持を難しくさせています。

南丹市の農業の現況は、2020年の南丹市農林業センサスによると、農家戸数は5年前比で384戸減(13.7%)の2,420戸(販売1,535戸、自給的農家885戸)、そのうち仕事として主に自営農業に従事している基幹的農業従事者数は1,446人となっており、平均年齢70.2歳、65歳以上が1,218人と全体の84.2%を占めています。また、後継者がいない農家は1,066戸で、全体の66.6%に上ります。(出典:※に同じ)

人口減少対策の1つとして南丹市への新しい人の流れを作るべく、移住・定住促進にむけた空き家バンクの整備が進み、2015年から定住促進サポートセンターが設置されるとともに、移住者への住宅購入や整備のための支援、起業支援などの充実を含め、積極的な取り組みが実施されています。2022年からは南丹市参農サポートセンターとして、新たに「農」に取り組みたいという方に向けた相談窓口が開設され、小規模の自給的な農も含め、農地を活用したいという方も対象に、多様な形で地域に根付いた農への関りができるようにサポート提供が始まりました。



南丹市定住促進サイト
nancla(なんくら)
(空き家バンク情報あり)

2. 南丹市の関連情報

農×地域シンポジウム2025 「未来を耕す～根をはり つながる 道づくり～」

日時：2025年2月15日（土）

会場：明治国際医療大学10号館

開会 9：50

ドキュメンタリー映画上映 10:00～12:10

「百姓の百の声」 監督 柴田昌平 製作・配給 プロダクション・エイシア

つながるマルシェ

11:00 開始

🌱 昼休憩 🌱

全体会 13:30～14:45 パネルディスカッション「根をはり つながる 道づくり」

秋津 元輝 さん（京都大学教授／食農社会学・食農倫理論、明治国際医療大学新学部設置準備室長）

柴田 昌平 さん（ドキュメンタリー映画監督）

谷口 光里 さん（谷口農園）

山内 守 さん（南丹市副市長）

ドワイヤー はづき＊（特定非営利活動法人つむぎ）

ファシリテーター 山本 奈美 さん

（京都大学大学院農学研究科研究員（非常勤）、明治国際医療大学新学部設置準備室）

分科会 14:55～16:15

① 「農と地域のこれから」

秋津 元輝 さん（同上）

香川 賢人 さん（株式会社京八／株式会社京Work 代表取締役）

西村 寿 さん（農村RMO摩気 副会長）

山内 守 さん（同上）

ファシリテーター 鈴木 健太郎＊（369商店／（一社）京都オーガニックアクション代表）

② 「百姓のナマの声」

柴田 昌平 さん（同上）

下間 康広 さん（しもつま農園）

須賀 智昭 さん（農園negu）

谷口 光里 さん（同上）

堀 悦雄 ＊（丹波ハッピー農園）

ファシリテーター 山本 奈美 さん（同上）



あきつ もとき

秋津 元輝 さん

京都大学教授／食農社会学・食農倫理論、
明治国際医療大学新学部設置準備室長

香川県出身。環境問題への関心から47年前に農学部を志しました。農村社会研究を皮切りに、近年では食を焦点として人間と農村を結ぶ研究に注力してきました。本年4月からは明治国際医療大学に移り、従来の農学の転換を進め、食からの地域再生をめざして新学部の創成をおこないます。

やまうち まもる

山内 守 さん

南丹市副市長

南丹市園部町出身。平成元年6月、園部町農業協同組合に入組後、京都農業協同組合信用担当常務、京都府信用農業協同組合連合会理事を歴任。平成30年7月からは、南丹市副市長に就任、現在に至る。

たにぐち ひかり

谷口 光里 さん

谷口農園

南丹市日吉町出身。代々農業を営む家に生まれ育つ。2016年関西学院大学人間福祉学部卒業後、日本農業経営大学校で2年間農業を学び、2018年4月に就農。現在はハウスで数品目の野菜を農薬、化学肥料を使用せずに栽培し産直団体に出荷するほか、水稻の作業受託を行っている。

ドワイヤー はづき

特定非営利活動法人つむぎ 代表理事 *

兵庫県神戸市出身、南丹市日吉町在住。小さい農×移住を実践した当事者としての視点を活かし、里山農村での多様な担い手を増やすべく、講座などを企画、運営している。環境、平和、国際交流の分野で通訳・リサーチ業を営む。お米と卵を自給中。

分科会①農と地域のこれから

かがわ けんと

香川 賢人 さん

香川興業 代表

株式会社京八／株式会社京Work 代表取締役

南丹市日吉町出身。2012年に香川興業を設立。

2017年に株式会社京八を設立し、九条ネギ・野菜・米・加工品の生産・販売・加工・卸を行う。

2024年に株式会社京Work代表取締役に就任し、就労継続支援A型事業所の運営を行う。

にしむら ひさし

西村 寿 さん

農村RMO摩気 副会長

南丹市園部町出身。NPO法人 摩気高山の郷振興会 副理事長兼事務局長。2011年京都府を退職後、2016年「摩気高山の郷振興会」の設立と同時に理事に就任。2018年に副理事長。2024年から摩気振興協議会(RMO)副会長。現在は併せて、農業に従事。

分科会② 百姓のナマの声

しばた しょうへい

柴田 昌平 さん

ドキュメンタリー映画監督

東京都出身。1963年生まれ。NHK、民族文化映像研究所を経て独立。初監督作品『ひめゆり』で文化庁映画賞大賞他受賞。代表作に、山村に暮らす老人と高校生の交流を記録した『森聞き』、食を切り口に日本人と自然の関係を描き出す『千年の一滴 だししょうゆ』などがある。

しもつま やすひろ

下間 康広 さん

しもつま農園

南丹市園部町出身。農業高校卒業後、社会人を4年経験したが、はっきりとしたやりがいを感じたく就農。地域での畑を預かり、規模を拡大していく中で、人や地域との関わりに幾度となく助けをもらい、繋がりの大切さを実感した。高齢化が進む農業分野の中で繋がりを大切にしたいアクションを起こしていきたい。

未来を耕す
～根をはり つながら 道づくり～

*は実行委員会
メンバー

■ やまもと なみ

山本 奈美 さん

■ 京都大学大学院農学研究科研究員（非常勤）、明治国際医療大学新学部設置準備室

■ 大阪府出身。国内外のNGO職員として平和・開発・環境問題に取り組んだ後、京都の山間地で有機農業を実践してきた。現在は大学にて教鞭をとりながら、持続可能な食と農、有機給食、学校菜園、移住労働者（特に在日ブラジル人コミュニティ）の食と農などをテーマに研究活動を行う。

■ すずき けんたろう

鈴木 健太郎

■ 八百屋369商店／京都オーガニックアクション代表理事 *

■ 神奈川県出身。2010年に京都市内から南丹市に移住。農村社会が構造的に持続可能でないことに衝撃を受け、2014年にLocal&Organicをテーマに宅配専門八百屋369商店を開業。2017年に、それぞれ孤立している有機農家や小売店を繋ぐ共同プロジェクト「京都オーガニックアクション」立ち上げ。



■ すが ともあき

須賀 智昭 さん

農園negu

京都府宇治市出身。19歳から10年間生花店勤務。独立を目指し花の本場フランスへ留学。留学の際、際循環型有機農業を体験作物の美味しさと生活や人との触れ合いに魅せられ帰国後農業を始める。現在お米を中心に野菜、花などを栽培。自ら栽培した花でワークショップを開催中。京＋草ピラ、自然農、自然栽培農家が集まるコミュニティに参加活動中。

■ ほり えつお

堀 悦雄

丹波ハッピー農園 *

兵庫県丹波市出身。北海道で牛飼いを学んだ後、1995年から南丹市八木町で農業を始める。現在、無農薬・無化学肥料で複数種類のお米を同じ水田で育てる「虹いろ米」や、大豆を約10町の農地で栽培。月1回「マイペース百姓交流会」を開催し、経験や農法などを問わず、また、百姓でなくとも食や農に関心のある人なら参加できる集まりの場を作ってきた。

ご参加のみなさん

このシンポジウムには、南丹市内および京都府、大阪府、兵庫県、滋賀県から多くの皆様にご参加いただきました。

地域住民や農家の方、大学生や農業に関わる若者、つながるマルシェ会場には小さなお子さんも多く、年代も幅広く、多様な背景、関心をお持ちの方々にお集まりいただきました。

以下はご参加いただいた方々の人数およびその内訳です。

全体参加者数

※映画上映および全体会/分科会にご参加いただいた方の人数です。つながるマルシェのみご参加の方は含まれません。

全体合計 207名

内訳

南丹市内 90名

南丹市外 117名

(うち、学生 21名)



5. 開催の詳細と内容のまとめ



ドキュメンタリー映画上映

「百姓の百の声」

監督 柴田昌平 製作・配給 プロダクション・エイシア

食べている限り、
誰の隣にも「農」はある。

なのにどうして、
これほど「農」の世界は
私たちから遠いのか。



これは自然と向き合い
作物を熟知する百姓たちの
叡智を訪ねたドキュメンタリー

「耕す人々」の世界の入り口が
ここにある。

映画『百姓の百の声』より



「百姓の百の声」制作秘話記事抜粋

「・・・おそらく、僕たち消費者がふだん触れる農業は、「問題」や「課題」として農業を伝える報道か、あるいはその逆で「ユートピア」として謳いあげるかのどちらか。「こんな困ったことがある」「こんな困った人たちがいる」、あるいは「こんな素晴らしい取り組みがある」——真っ黒か、真っ白か。つまり二極化された言論空間になっているのでしょう。そこには、普通の農家の人たちの声はありません。

だからこそ、田んぼで農家の人たちが何と格闘しているのか、ビニールハウスの中で何を考えているのか。僕たちが漠然と「風景」としか見ていない営みの、そのコアな姿を知りたい。たくさんの農家と出会い、その皮膚感覚や生き方を知りたいと思ったのです。」

出典：
農家を肌で感じる旅へ
現代農業：2022年9月号 246ページ～252ページ
連載タイトル：映画『百姓の百の声』制作秘話(1)
執筆者：柴田昌平

ご参加いただいた方の声

各農家さん(百姓)が自分でやりたいと思ったことを自身で考え自分で行動されている。規模もやり方も異なっているのですが、それぞれが他人のせいにはしないというとても清々しい生き方をされているのが印象的でした。百姓の世界は生き方の多様性、自主独立の気持ちが一番の魅力だと感じました。

ナレーターの言葉一つ一つ、たねの写真に魅了されました。百姓は百の仕事ができる人、すごいですね。



百姓は哲学者だ！

やっぱりーから食べ物を生み出す農業という仕事はカッコいいなぁと誇りに思えました。

小農の強さと不安になることを楽しみに変えられる百姓のド根性を見せられました。

普段から生産者さんには感謝しています。ひとくくりに「農家さん」と呼んでいるけど、「百姓」とは本当に百通り、百の思い、百の声、百の知恵、百の苦労があるのだと思いました。国の政策に翻弄されながらも、百姓の力で私たちの暮らしを支えてくださっている。米が高い、野菜が高いというだけでなく、もっと足元を見て、この映画を見てほしいと思います。百姓がいなくなったら私たちは生きていけないのだから。



土地を離れることのできない百姓の創意工夫が実を結んだとき、自分ひとりにとどまらず周りの人、遠く離れた地域にまでその継承を望む生き方は尊敬でしかありません。



全体会 13:30~14:45

パネルディスカッション

「根をはり つながる 道づくり」

農と地域の「今」を様々な視点からとらえてみましょう。どんな道が見えてくるでしょうか。

秋津さん：

世界の農業の状況は、家畜の飼料、甘味料系の添加物などのためのトウモロコシ生産、原料生産が増え、農業の機械化に伴いどんどん変化している。同時に食も変化しており、食べているものの原料がどこから来ているのか、超加工食品などの影響も研究されている。圧倒的多数の都市に住む人々が地域や農につながり、持続的な農業の未来を考えていくには食べるというところから考えていかなければならない。南丹でも農業をしている人が減ってっている状況だが、そういう人たちも食べ物は食べる。食べ物を基礎にして生きていく、いかによい食を確保していくのか、いい農業と結びつくということが重要。

同時に地域と都市が一緒に考えていくような仕組みづくりが必要。食をベースにし、農業も含めた地域づくりを地域から始めることを提言している。



谷口さん：

県外で就学したのち、6年前にUターンで就農。農業を継いでほしいと言われたわけではないが、地元を離れて暮らす中で生まれ育った地域の良さ、食べ物のおいしさに気が付き、農業を暮らしとしてではなく、仕事として行いたいと思った。地域の風景や特産物を次の世代につなげたい、人の命を支える食を農業の立場から取り組んでいきたい、ということが原動力。

多様な生物の力があって命がつながり、食卓につながっているということをもっといろんな人を感じてもらって食べ物を食べてもらいたい。

気候変動や災害、担い手の減少など農業の課題はたくさんあるが、自分が農業で生計を立てるようになるということが、この地域の農業の基点になるよう頑張りたい。



ドワイヤー：

移住して移住者目線で作ったガイドブックをきっかけに、小さい農を始めたい新たな人たちが空いていく農地を活用できるようになるための講座を始めた。高齢化や後継者不足で大好きになったこの農村の風景、里山がなくなってしまうのでは、という危機感、焦りを感じている。中山間地の田畑は生物多様性や水源という意味でもとても重要な場所。営農している農家さんだけがその管理や維持をするのではなく、営農している人がいて、その周りにたくさん小さい農をする人たちがいるという状況にしていきたい。

地域ときちんとつながり、農村、風景、土を守ってきた人々たちへのリスペクトと、「こんなことをしたい」というパッションをもって農や地域に関わることができる人を増やしたい。



現在の取り組み、課題、 目指しているものを教えてください。

山内さん：

JAグループで29年、その後副市長として7年目。市としては、農業に深くかかわりのある脱炭素と地域防災に力をいれていこうとしている。八木にある日本初のバイオマスプラントで作る液肥を使って土づくりをする循環型の農業を「環境に負荷をかけない農業」として地域のブランド化の視野にいれていきたい。

循環型農業での地域ブランド化と大学での農学部開設などを通して南丹市は農業、というところでも知らしてもらえたら。



柴田さん：

学生の時、文化人類学の調査実習で山梨に連れて行ってもらったときに村で農業を手伝い、地域のご老人たちの話を聞きながら1年間過ごした経験から地域とつながることが大好き

きになった。これまで点で農村をみてきたが、面として農業のことを知りたくなり、「百姓の百の声」のドキュメンタリーを作ろうと思った。農家に関する映像は、「かわいそうな農家」やスマート農業、などパターンができていくが、実際に会った農家さんたちはクリエイティブで、自分が理解していなかったことの多さに気が付いた。

農家や農業を問題をベースでみるのではなく、それぞれ違う農家さんに出会い、農と市民との距離を少しでも縮めていきたい。



登壇者

秋津 元輝 さん (京都大学教授／食農社会学・食農倫理論、
明治国際医療大学新学部設置準備室長)

柴田 昌平 さん (ドキュメンタリー映画監督)

谷口 光里 さん (谷口農園)

山内 守 さん (南丹市副市長)

ドワイヤー はづき＊ (特定非営利活動法人つむぎ)

ファシリテーター

山本 奈美 さん (京都大学大学院農学研究科研究員(非常勤)、明治国際医療大学新学部設置準備室)

「根をはる」「つながる」とは？ これからのビジョンは？

山内さん：南丹市の農業は産地もあるが、多品種小ロットが中心。入りやすい農業と言える。2046年には人口が2万人を切るといわれているが、そうなっても農業に携わる人口はそんなに減ってない、となるようにきちんと考えていかなくてはならない。農業を営む人が農業を支えるのはもちろん重要だが、それ以外の人たちが支えることに関わっていくことが必要。

国の「みどりの食料システム戦略」で目指す25%の有機農業と、そうではない75%の農業がどうかかわっていくのかということも考える必要がある。大規模農業、小さい農業、珍しい野菜を作って供給する人や村づくりと一緒にやる人など、いろんな形の農業をしている人が一緒に根をはってもらえたらよいと思う。

農家を見て子供たちが継いでいきたいと思える農業でなければならない。農業所得がきちんとある農業をいろんな角度から作っていききたい。



谷口さん：根をはるということは自分にとって農業できちんと生計をたてるということ。つながるということでは、食べる人とのつながりを大事にしたい。地域の学校や、地域の子供たちと一緒に食べ物を作るということをやっているが、これからの子供たちや若い人たちにとって遠いところにある農業や、食べ物を作るということの関りしるを農家の立場から広げていきたい。農業を使うことにも理由があって、いろんな形の農業への理解も一人一人の農家と食べる人がつながることで生まれていくものだと思うので自分の農業を根をはってしながらやっていきたい。

南丹はいろんなアプローチでできる環境があるので、普段農に触れていない人もこういう機会をきっかけにつながっていただけたらいいと思う。

柴田さん：有機農業やその世界は面白くなってきていると感じている。撮影で入ったところは中山間地が多く、移住してくる若い人たちが耕さない農業を始めたり、科学的知見も少し取り入れて、機械ではなく根っこに耕してもらうとか、昔からおばあちゃんたちがやっていることを少し新しく変えてやっている。希望、可能性があるのだなと感じている。



秋津さん：新しい有機農業の学部ですることとして考えると、ドキュメンタリーで「農家力」と言っていた、これまでの農家が持っている知識を科学的な研究とつないでいくことが大きな課題。有機農業を実践してきた人たちの方が進んでいるが、科学的な研究がされてこなかった。もっとトータルに考えた科学研究が必要。

食からの地域づくりというところで考えると、地域全体をブランド化していくことが必要。1つは食、もう1つは誰でも農業ができるというような、小さな農の担い手として、南丹市にたくさんある谷筋などで農業ができる、根をはることができる、というようなところもブランド化できる1つなのでは？

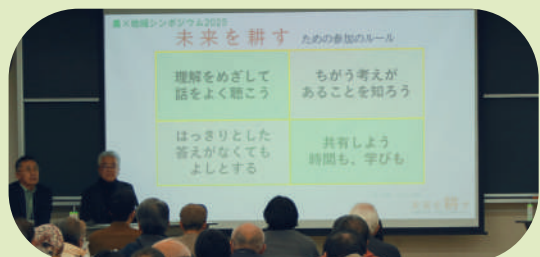
体にいいものは環境にも持続可能性にもいいという世界を作ること。明治国際医療大学でいうと、医食同源、そこに身土不二をいれていくような2本立てがよいのではないかな。

南丹市に住むと何ができるのか、ということを情報としてPRし、住みたい地域としてだしていくことが必要。

ドワイヤー：鍬一本で畦を作るような、機械化前に積み重ねられた農の技術は、小さい規模で農を実践するにはとても重要。その技術や経験とつながることができるのは今しかない。

つながっていくには、このシンポジウムの場のように対話を続けること。移住やこれから農を始めたいと思っている人は、「中山間地農村の課題を解決しなければ」ではなく、「やりたい」というパッションを原動力にして、地域とつながって対話を生み出してほしい。

農学系新学部開設に関して、地域としては何かをしてもらうのではなく、農に関連して学生が集まるということのをきっかけに一緒に何かしようという、積極的な姿勢でかかわっていけるとよいと思う。



①「農と地域のこれから」

2027年4月、明治国際医療大学に日本初となる有機農業に特化した農学系新学部（生態食農学部（仮称・設置構想中））が開設される予定です。地域の農業と大学、どのような展望が描けるのでしょうか。

どんな農業に取り組んでいますか？ 有機農業への取り組みはありますか？

香川さん：九条ネギの生産を通じて、農産物が業者を経由しなければ消費者に届かない現状に疑問を抱いた。農業にはさまざまな形があるが、消費者に直接届けことが重要だと考え、販売先の開拓に力を入れることを決意。現在は社員を雇用し、栽培面積を拡大するとともに、他の農家にも生産を委託している。地域とのつながりを深めるため、地元の車屋で粗品のティッシュの代わりに野菜を配布したり、学校給食や飲食店に野菜を使ってもらうなどの取り組みを進め、認知度を向上させた。こうした活動を通じて、地域内での販売機会を増やし、農業の価値を再認識してもらうことを目指している。

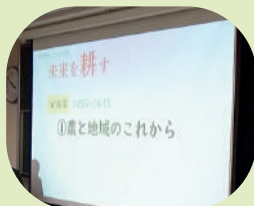
2024年には（株）京Workを設立し、就労支援A型の枠組みを活用して、一般就労が難しい人々にも雇用の機会を提供している。NPOや農業法人ではなく、利益追求を基本としながらも、社会貢献の視点を取り入れた経営を行っている。

農業の現場では人手不足により農薬散布が十分に行えず、結果として低農薬の栽培になっているが、それ

を「無農薬」として売り出しても市場では評価されにくい。この課題にどう対応すべきか模索している。また、明治国際医療大学に有機農業の学部が新設されることを知り、今後の農業に新たな価値が生まれることを期待している。有機農業は独学で取り組む人が多く、何が正解なのか分かりにくい部分があるため、学術的な知識を得ることで、より確かな農業の実践につなげたいと考えている。



西村さん：子供がいるから登校通路の雪かきをするなど、地域をまとめていた文化が小学校が廃校になることでなくなった。いろいろな文化イベントや“Make the Future”というビジョンを作って5年続けたが、若い人たちが残る魅力を保つためには雇用を作っていくしかないといけな。地域産業である農業で雇用を作ることを考え、「摩気米（まけまい）」のブランド化や、「厄介者」として地域にある竹をチップにして肥料にするお米作りを今年始めているところ。



西村さん：大型機械化で高齢化、人材不足を補うことを目的として農事組合法人「大西営農組合」で集落営農にした。後継者の意見を聞くと、会社という枠を作って後継者育成をする方がやりやすいと考えたことと、納税の部分を法人できちんとできるようにした。昨年からは摩気地域では、農水省の農村RMOという枠組みも取り入れている。

モットーは好きでやるということ。面白いこと、頑張っ支えていこうとみんなが思えるもの、少しでも儲けられるものであることが大事。

地域の中で有機を実践している農家もいる。村の30町歩のうち、22町歩が個人から法人に預けられているが、そのうち4町歩は合鴨の有機で米作りをしている。やってもらいやすい土地を提案して使ってもらう形。

組合では畦草刈りを年間5回してもらうようにお願いしているが、有機農家は忙しい分、草刈り回数が少なることもある。そういうところは目に見て、時期はあわせてもらったりしながらやっている。



これからの農と地域をどう考えますか？

香川さん：新規就農したい人がやりやすい環境が必要。地域が受け入れるということに課題がある。やりたい人はたくさんいるので、地域の人がどんな目で新規の人を受け容れるのか、ということ。また近くで農家さんのものを売ることができるようにしていくことが必要。そこを担うことが使命かなとも思っている。

山内さん：試行錯誤、やってみてだめだったら次、ということ継続しているという経験からの学びはぜひ聞いていきたい。南丹市として、てっぺんには有機農業があるけれど、そこにいくまでの環境に負荷がかからない農業というところで、バイオマスの液肥を使って土づくりなども活用したり、ブランド化を考えていきたい。農業法人としてどうこれらを活かしていくのかを相談しながら進めていけるような農業政策ができたらと思うし、失敗も壁もいろいろ聞きたいと思うのでこれからも協力をいただきたい。



登壇者

- 秋津 元輝 さん（京都大学教授／食農社会学・食農倫理論、
明治国際医療大学新学部設置準備室長）
西村 寿 さん（農村RMO摩気 副会長）
香川 賢人 さん（株式会社京八／株式会社京Work 代表取締役）
山内 守 さん（南丹市副市長）
ファシリテーター
鈴木 健太郎＊（369商店／（一社）京都オーガニックアクション代表）

明治国際医療大学の農学系新学部は どのようなことをするのですか？



秋津さん：「農学部アグロエコロジー学科」で検討中。地域の有機農家の方との連携で知識や知恵を取り込むということを考えている。農学系学部に必要な実習農場を持つ、有機を中心とした農業法人を作り雇用を生み出すということをやっていききたい。

食と農と社会の融合(案)として、カリキュラムは学部時代からプロジェクトを自分たちで考え、地域の課題を見つけて取り組み、解決にもっていくことをしたいので、地域とのつながりが必要。どこでも使える知識ではなく、局所的な知識(気候、土壌、水分なども含め)を前提とした農業の在り方を追求していけるとよい。

「有機」とはいったい何なのかを理解したうえで、農家や流通、加工などあらゆる分野での人材が輩出される学部を目指す。「みどりの食料システム戦略」での農水省の指針である「有機」をきちんと理解して担っていける人材はまだ少ないので、そこをきちんと扱える人を育てるということをしていきたい。

有機農家をやりたい人は増えていて、学校もできてきているが、もう少し踏み込んで学べる場所ということで将来的には社会人入学や有機に関心のあるアジアの留学生などを受け入れていくことも検討していきたい。

会場からのコメントと質問

Q.農産物を地元で消費するというところのマーケティングをしてほしい、あるべき姿をプランニングして実施してほしい。

A.山内さん：売り先を決めるマーケティングが重要。いろいろな売り方がある中で、知恵を出していくことが必要。

学校給食は米飯だけど、お米を含めて地産地消は平均26%しかできていない。これをどうやって改善していくかということに関しては、どう量や食材を揃えていくのかということも含め、知恵を出して相談して考えていきたい。生産者の協力があることは第一前提であるので、今後ご協力をいただきたい。

Q.研究と実践を合わせたものがあるのは必要なのでとても良い。せっかく有機農業を中心とした研究と実践をされるということなので、一般社会人も有機の勉強ができるように研修施設にしてもらいたい。栽培管理をする人材が必要となると思うので、南丹市を中心とした有知識者の人たちに関わってもらおうようにできれば地域の活性化になる。

A.秋津さん：本格的に有機農業の技術を身につける研修コースを設けられるかどうかはわからないが、入門的なものはできるのではないかと考えている。地域の有機農家さんの技術職員としての関りは必須だと思っている。研究作物を作っても教員以外で世話をしてくれる人が絶対に必要。まだ白紙の状態だけれど検討していきたい。



②「百姓のナマの声」

多様な農家を訪ねてきた柴田監督を
囲み、映画に一步踏み込んで、この
地域の「声」を聴いてみましょう。

下間さん：

就農して25年。最初の4年は難しい時期が続いたが、地域に支えられて今何とか地域の担い手としてやらせてもらえるようになった。70枚ちょっとで合計9haの田畑で米を中心に黒枝豆や小豆、ハウスでキュウリ、露地でナスも育てている。地域から「もうできないからやって」と言われたら断らずに預かって田の守りをしている。能率は悪いが地域から頼ってもらえ、地域の人に自分の田んぼでできた米を食べてもらうことを原動力にがんばっている。

誰もが参加できる農業、つながる農業を目指していきたい。中山間であまっている田んぼをどうやって守りをしていくのかと考え、地域の振興会で出会った大阪の牧場と飼料米作りをしたり、大学生に収穫や販売までやってもらうこともした。鹿、イノシシなどたくさんの野生動物の獣害が多い中でどうしたらいいのか今後考えていきたい。

| どんな農業を実践されていますか？

堀：

農薬も肥料も使わない農業を南丹市に来て始めた。自分で育てたものを食べたいという思いで農業をしている。自分の食料をメインに、余ったものを売って生活している。お客さんには「今は売っているけど、何かあったらあなたの分はないですよ」と言っていたが、誰も動かなかった。今回、火事があったって言うことが本当のことになり、実際に農作業を始めたお客さんがいる。私の夢は非農家からちょっと農をやりたい、自分の食べるものを自分で育ててみたいと思ってもらい、そういう人が増える事。専業農家は正直楽ではない。農業1本で飯を食おうと思わなくてもいいから、少しでもやってみようと思ってほしい。ちょっとだけでも『私も作る人になった』という人を増やしていくのが今の日本、地方で大切な事だと思う。



谷口さん：

日吉町の農家で生まれ育ち6年前にUターンして就農。農薬・化学肥料を使わずに黒豆、お米など多品目を露地とハウスで栽培している。無名で窮屈と言われることもある南丹市でも、生まれ育った風景が好きで、この美しさを次の世代に残したくてここで農業をしている。今までの栽培方法では太刀打ちできない気候変動や獣害や、手に負えないスピードで地域内に農地が空いて耕作放棄地になっていっている。自力で解決できないこともあるが、他の農家の力も借りながらやっていきたい。



柴田さん：

妻の大兼久さんと体験農園で借りている30㎡の広さの区画で野菜をつくっている。



須賀さん：

八木町神吉で15年ほど、無肥料の栽培で米と花を育てている。フランス留学中に食べた野菜を通して生きてる実感がもてた。日本に帰って有機農業を始めたら、野菜が牛糞の味だったり、葉物が全部同じ味。そこでいきついたのが無肥料の農業だが、やっている人が少なく教えてくれる人がなかなか見つからない中、10年前に堀さんと出会い、1年、指導を受けられた。

神吉上区に移住した時、自然栽培という言葉がまだあまり知られていない時代だったが、「ここに人が集まってくる」という直感があった。現在、「京+草ビラ」というグループで5人、それ以外にも自然農をやりたいという人が4~5人農作業をしにきている。神吉全体で150町ある内、上区は30町、その内10町は自分とメンバーで自然栽培/有機栽培で管理している。「みどりの食料システム戦略」の有機農地25%目標と照らし合わせると、神吉の上区はすでに33%で達成できてしまっている。



登壇者

柴田 昌平 さん (ドキュメンタリー映画監督)

下間 康広 さん (しもつま農園)

須賀 智昭 さん (農園negu)

谷口 光里 さん (谷口農園)

堀 悦雄 * (丹波ハッピー農園)

ファシリテーター

山本 奈美 さん (京都大学大学院農学研究科研究員(非常勤)、明治国際医療大学新学部設置準備室)

農に関わる人集めがカギ。 どうやって集めていますか？

須賀さん：亀岡で自然栽培の研修を受けたメンバーと、堀さんが開催している百姓交流会に集っていた人たち、自分の元からの知り合いが集まった。

下間さん：僕らの地域は助けを求めた。野生動物も多い山の中で人に来てもらえることが少ない場所。このままいくと田んぼの管理ができなくなるので何とか、この谷でできないかと地域振興会の活動に参加されている大阪の団体に助けを求めた。そうしたら高齢化率が55%以上という課題を抱えている牧場と出会い、スマート農業の活動の場を求めていることから一緒にやるようになった。

谷口さん：地元だけでは手に負えない農地が増えてきていて、長く農業をしている人も人が来てもらわないと農業が続けていけない。胡麻は水が大切で、ため池があるが水路の維持管理にたくさんの人出が必要で、数軒の農家では限界。多様な人を受け入れていきたい。ただいいわさも悪いわさもすぐ広まるのが田舎。農地には思い入れがあるし、使い方はほんとうにいろんなひとが見ているんだという意識をもって地域の人たちとうまくやっていくことも必要。

堀：11年前に始めた「マイペース百姓交流会」は北海道で三友盛行さんが開催していた「マイペース酪農交流会」に倣った。無農薬でやっているという話など地域の人は話が合わないこともあり、話ができる仲間がほしいと思って始めた。非農家から農業を始めたいという人も話ができる場としてスタート。仲間ができたらはげみになる。

谷口さん：依頼があれば受け入れているけど提供するところまではできていない。新たに農業を始めたいという人は厳しい道を自分で入っていきたくてという熱量がすごい。人に伝えるというところをどうやって行くのか、来た人からの刺激を受けながらやっていきたいと考えている。

農業での移住と地域出身のメリットデメリットは？

須賀さん：農業をやる前からのつながりを通して生産物を買ってもらったりしている。自分が始めた15年ほど前は有機自然農に対して相手にしない、という雰囲気があったが5年くらい前から地元でも世間的にも感覚が変わって、抵抗がなくなってきた印象。



下間さん：営農しているものからすると、新たにに使用してもらうのは大賛成。土地は昔から守ってきた思い入れの強い場所。たとえ耕作放棄地でも思い出が詰まっているので来ていただく方にもそこは理解してほしい。ただ来てもらう人だけが理解するのではなく、お互いに理解しようとするのが一番大切。話をしていって相互理解を進めていきたい。

堀：30年前と比べると、隔世の感がある。維持管理をできる人に任せようという雰囲気が地域に出てきている。だが、非農家から始める人は、自分がやるから自分の勝手にするというのではなく、2～3千年かけて作ってきた土、農地を管理させてもらえる、作物を作らせてもらえる、という気持ちで地域のルールも理解して入ってほしい。両方の立場の人ともに自分の思いだけではだめ。お互いに少しずつ我慢しあってよりよい方向にいける落としどころをみつけるのが一番の課題。

会場からのコメントと質問

Q.移住して畑の周りに住むというのは可能でしょうか？

A.谷口さん：農地付きの空き家が出てきているが、初めての人が管理しきれぬ大きさかどうか心配。また、家の前に農地がありますというパターンは少ない。空き家バンクも南丹市はある。

堀：タイミングをずっとはかればいつか声をかけてもらえるかも。どこまで粘れるか。辛抱していれば話がくることもあるかも。

Q.スーパーで売られている野菜の規格が厳しすぎて、作ってそのまま畑に破棄されていくものが増えている。農家から声をあげたらどうか？

A.堀：それは農家から言っても世の中は変わらない。規格に厳しく、というのは消費者が求めるもの。食べる人が声をあげないといけない。農業の問題は農家の問題ではなく、食べる人の問題がほとんど。食べる人が認識を変えないと、世の中は変わらない。



6. 登壇者からの声

秋津元輝さん

私は報告者として全体会と分科会①に出席しました。南丹地域は日本の中山間地域のひとつとして、人口減少と高齢化、農業生産の縮減などの問題を抱えています。それらの目の前の課題にどのように対応するかは重要ですが、一地域の課題はつねに全国や世界の状況と連動しており、私たちの社会、とりわけ食や農が今どのような社会環境におかれているのを知っておかないと、今後の方向性を見誤ることになりかねません。全体会の報告ではそのようなことを意識しながら、今まで近代化と工業化を軸にして進んできた食と農の状態を振り返り、大きな視点で何を反省し、その結果をもとに身の回りの地域での活動としてどのように方向づけて実践していくかについて考えようと思いました。まずはこの南丹地域の特徴や優位性について、多様な立場の人びとが参加しながら、ともに考えだしていく機会や場をつくり出していくことも必要と感じています。

私がこのシンポに呼ばれた大きな理由は、この地域にある明治国際医療大学に新しく有機農業に特化した学部を創設しようとしているからで、分科会①ではその内容について現段階での構想をお話しました。この地域のひとつの特徴は、豊富な自然に囲まれた小規模な谷が連なって生活の場を作り上げているところだと思います。自然や文化に多様性をもつそれぞれの地区が、自然と環境に適合した食の生産地となることによって、だれでもが農や食に親しめる場所として地域全体をブランド化していくという未来像を考えています。そのときに、自然環境を最大限に利用する有機農業や自然栽培は、社会全体の未来を占う意味でも不可欠の要素になると信じています。新設予定の農学部食農エコロジー学科では、そうした理念を基軸として、中山間地で暮らすことの幸せを再び取り戻すことを目標として、学生たちの教育とアグロエコロジー的研究を進めるとともに、地域に寄り添いながら、中山間地におけるひとつの未来モデルの提示ができればと考えています。

下間康広さん

まずは「農×地域シンポジウム 未来を耕す」が、想定以上の多くの方々に参加いただきながら大盛況の中開催された事をお喜び申し上げます。

私自身、力不足ながら今まで3回登壇者として参加させていただきました。そして、毎回とても楽しい時間と経験を皆さんからいただいています。

というのも、このシンポジウムでは有機無農薬・自然農法といった有機農法主体の方々や、私のような減農薬・土地利用型栽培の方々など多種多様な方法で『農』に関わっている方が参加されていますが、それぞれ違う考えを持ちながら互いを尊重し、否定することなく話を聞いたり意見を言っただけなので、参加する側にとっても非常に心地よく有意義な時間となっています。

今回、ディスカッションの中で山地・中山間地での耕作地の放棄にも少し触れさせていただきました。開催地である南丹市は典型的な山間地になりますが、『農』に触れるチャンスはたくさんあります。小さな『農』や大きな『農』など色々ありますが、このシンポジウムが『農』を始めるきっかけや『農』とつながる機会となってほしいと願っています。シンポジウム開催に携わられた皆さん、本当にありがとうございました。

実行委員会の皆様には大変なご苦労があったと思います。が是非今後とも続けていただき、どんどん未来を耕していただきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

香川賢人さん

農×地域シンポジウムに参加させていただき、「農と地域のこれから」をテーマに、多くの皆様とともに語り合う貴重な機会をいただきました。南丹市内外から想定を超えるご参加があり、それぞれの視点や経験をもとに、農業が持つ可能性について熱い議論が交わされたことを大変嬉しく思います。

私たち京八は、京都産の食材を活かした商品づくりを通じて、地域の農業と食文化を未来へつなぐことを使命としています。その中で改めて実感したのは、農業とは単なる「生産活動」にとどまらず、人と人をつなぎ、地域を育む力を持っているということです。農業を支える農家の方々、加工・販売に携わる事業者、そして消費者が一体となることで、持続可能な地域の姿が見えてくるのではないのでしょうか。

本日の議論を通じて、「農」に関わる多様な道が拓かれ、伝統を守ること、新しい技術を取り入れること、地域外とのつながりを深めること等どれもがこれからの農業に欠かせない要素です。京八としても、京都の恵みを全国・世界へ届けることで、この地域の魅力を広げていきたいと考えています。

また、地域内外の方々が交わることで生まれる新たなアイデアや協力関係の重要性も強く感じました。南丹の農業には、まだまだ発展の余地があり、私たち一人ひとりが小さな一歩を踏み出すことで、大きな変化につながるはずです。

「農と地域のこれから」を考えるこの機会が、皆様にとっても新たな挑戦のきっかけとなれば幸いです。京八も、感謝と挑戦の精神を持ち続けながら、京都の食文化を次世代へつなぐために歩みを進めてまいります。貴重なお時間をありがとうございました。

須賀 智昭さん

未来を耕す、農×地域シンポジウムにてお話をさせていただき機会をいただきありがとうございました。来場者が思いのほか多くて驚いたと同時に未来をよくしたいと考え、足を運び、何かに繋がりたいというエネルギーを感じました。

映画や色々な立場の方のお話を聞いて農業を始めそこに取り巻く問題は数多くあることがわかりました。今まではごく一部でしか語られなかったものが多くの方に直接共有できる場としてそこにありとても有意義でまさに未来を耕すシンポジウムだと思いました。

シンポジウムの在り方としてとりえず白黒つけない、お互いの立場をわかり合う努力をするという前提を置かれていた事にさらに良い未来を感じることができました。

分科会では上手く伝えられなかったかもしれませんが、僕や京+草ピラメンバーは純粋に作物を育てる事が好きな人が集まって活動しています。

小さな種から元気よく大きな作物になり、またそれを育んでくれる土、大地との関わり、命の循環、それを通して私達自身の生命のことまでに興味を持ち農業を楽しんでいます。

これからも地域や関心を寄せていただける方々と関わり合いながらこれからの未来を耕していきたいと思っています。ありがとうございました。

谷口 光里 さん

生まれ育った地域の風景を次の世代にも残したい。その思いで農業を始めたが、その気持ちと裏腹に、就農してからこの5年ほどでも地域の中には農業から離れる人が増え、農地を引き継ぐ者もなく荒れ果てていく耕作放棄地が目につくようになった。専業で農業を仕事としていても大規模化が難しい中山間地では、一人が担える農地面積には限界がある。

そうした中で農に関心のある多様な人々の存在は、一農家として大きな励みになる。この地域に住み、農業を生業としているからこそ出来ることは何か。シンポジウムを通して改めて考えさせられた。分科会では実際に同じ南丹市内でも地域外の新たな人々の農の営みによって守られている農地の存在を初めて知った。大規模化しにくい小さな農地も視点を変えれば、小さい農や多様な担い手の受け皿になる。まだ幼い我が子の記憶に残るこの地域の風景が、獣に荒らされた荒地ではなく、人々のいのちをつなぐ食を支える農地であるように。次の世代、未来に向けて、受け入れる側の私も多様な担い手と一緒に出来ることを考えていきたい。

西村 寿 さん

つむぎのコンセプトは田舎暮らし、移住、有機農業、食育等に止まらない。半農半X、小さな農業、地域づくり、共生、大規模農業、集落営農、ツーリズムなどすべてを包含する。だから私は共感させていただいている。

「難しいことはできないよ」というスタッフの方は「西村さんが日頃やっていることを言ってください」とのこと。「それなら、恥ずかしいけれどやらせてください」と発表させていただくことになった。

今回、私はシンポジウム直前に体調を壊したこともあり、参加そのものを心配しましたが何とか回復できましたので、自分の住む集落の法人農業の状況と10年前に閉校になった小学校の跡地を活用したNPOによる地域推進活動に絞ってお話をさせていただいた。大学の4年間を除いて生家を離れたことはなく、こじしか知りません。逆に、この南丹の暮らしを素直にお話することが私に求められているのだと考え、割に気楽に登壇することができました。

シンポジウム当日朝、会場につくと、多くの参加者であふれていました。こんなに多くの方が、南丹の農業や生活に関心を持ちつむぎの活動に共感している方が多いことに改めて驚きました。スタッフの献身的な運営にも感謝です。

今この地域では、有機農業や生活環境に興味があって移住してくださる方が増えていますが、全体的に見れば高齢化と過疎が進んでいるのが現実です。専業、兼業、慣行、有機、趣味農業、大規模農業、集落営農などを問わず多様な人たちがこの南丹地域で仲良く暮らして行くことが何より大切です。高い目標に向かって、ちょっとずつ進んでいくつむぎの活動とともに歩んでいきたいと思います。



山内 守 さん

未来を耕す

～根をはり つながる 道づくり～

まず初めに「未来を耕す～根をはりつながる道づくり～」をテーマとするシンポジウムに参加のお声掛けをいたことに感謝いたします。

パネルディスカッションでは、不慣れなこともありテーマに沿ってどれくらい的確にお話しできたのか、ご迷惑をおかけしたのではないかと少々心配をしております。

しかしながら、パネルディスカッションを通じて皆さんから多くの貴重なお話が聞けた事は、私にとって大変貴重な機会となりました。秋津教授、柴田監督、谷口さん、ドワイヤーさん、そして分科会の香川社長、西村副会長のお話のどちらを思い出しても地域農業への熱い思いに共感を覚えました。

私が言うまでもなく、農業を取り巻く情勢は様々な課題や問題を抱えています。今回のシンポジウムに集われたさまざまなお立場の皆さんが、それぞれの立場でこれからの農業を考えていただくことはとても重要なことで、お互いを認め合いながら規模や形態、経営、販路においても多様な農業を進めていくことが大切だとあらためて認識する機会となりました。

南丹市においては、農業は基幹産業のひとつとして大きな役割を担っています。近い将来どのような農業が南丹市に必要なのか、「みどりの食料システム戦略」では2050年までに目指す姿として、耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合を25%(100万ha)拡大することを目指しています。耕作放棄地を今よりも増やさずに環境に負荷がかからない農業をどのように進めるのか、そのヒントがこのシンポジウムにあったと思っています。それはやはり農業の多様性を大切にしてお互いを認め合い南丹市の農業を考えていくことだと思っています。

南丹市ではこれからバイオマスから生成される消化液を肥料として農業の土づくりに活かすことで、肥料としての利用価値を高め化学肥料低減による低コストで環境に負荷のかからない農業を目指すためにも、この強みを活かした農作物のブランド化を進めてまいりたいと考えています。

今回シンポジウムに集われた皆さんも応援をしていただければ大きな力となりますのでよろしくお願い申し上げます。



6. 登壇者からの声 (つづき)

堀悦雄

私は百姓（農業者）として暮らしてきた中で世間で言われる農業問題の大方が実は百姓の問題ではなく、自分では食べ物を生産せず命をつないでいる人たちの問題だと思っています。それを少しでも理解してもらいたい思いで映画「百姓の百の声」の上映も提案したし、分科会では農の現場のことをしゃべりました。

会で集まったアンケートの感想を見ましたが、反応していただいた方々は概ね良い反応をいただけたように思います。また、この会は3年目で年を追うごとに参加者が増えこの地域の中で存在感が大きくなり、認知度も上がってきていると思います。

大規模少人数で効率的に農業を産業的に運営していくのもいいとは言いませんが、結果として地域から人が減って行き地域の農業に不可欠のインフラ（水源、水路、農道、里山、その他の管理に支障をきたす現実が見え始めています。

農村風景には、直接お金にはならないけれど、その土地の百姓たちが営々と守ってきた手間仕事が大きな割合を占めています。この美しい農村風景を守り後世に残していくには大勢の人が小さな力でも出し合う必要があると思います。そのためには、少数の専業農家よりも多数の自給自足、家庭菜園、半農半X、自給不足も含んで関係人口を増やしていくことがよいのではないかと思います。

そのためには「農×地域シンポジウム」をぜひとも続けてより多くの人に自分の命の糧が生まれる場所、多くの生き物の躍動を感じ、美しい自然を自分も参加して守っている実感を持てる人を増やしていきたいと思っています。

7. ファシリテーターから

山本奈美さん

映画鑑賞会に始まり、全体会と分科会2でファシリテーターを務めさせていただきました。どちらも刺激的なセッションで、多くの学びと気づきを得ることができました。そこから持ち帰った「お土産」は、私自身の今後の活動や未来社会へとつなげていくためのヒントやツールとなりそうです。本報告では、特に印象に残った「道楽」「パッション」「守り」の三つのキーワードを軸に、気づきを整理したいと思います。

まず、「道楽」と「パッション」についてです。映画に登場した若梅さん（93歳）は、「己の職業を道楽と思え」と語っていました。もともと仏教に由来する『道楽』という言葉は、現代では否定的に使われることもありますが、若梅さんは『自らの道を楽しむ』という肯定的な意味で捉えています。

全体会では、多様な立場から農に関わる方々が、分科会2では、農を生業とする方々が登壇しました。登壇者の皆さんは、それぞれ「農」に対して熱い思い・情熱（パッション）を持っています。例えば、生まれ育った地域の風景を守り、次世代につなげたいという谷口さん、「頼りにしてるで」という地域の信頼に支えられてどんな田んぼでも引き受けると語った下間さん、フランスでの循環型農業の体験がきっかけで、仲間たちとおいしい野菜を育てる須賀さん、「ちょっとでも育てたい」という人たちとつながり、共に育てるコミュニティを築きたいと語った堀さんなどです。皆さんは、それぞれのパッションに導かれ、若梅さんの言う「自らの道を楽しむ」様子が印象的でした。

最後に「守り」です。下間さんの「田んぼの守（もり）」という言葉、堀さんの「田んぼは借りている」「使わせてもらっている」という象徴的な表現が心に残りました。田畑とは、「数千年にわたって先代（や生物）が育くんできた土」そのものです。農にたずさわる人びとは、その土を先代から受け継ぎ、次世代へと渡すまでの「お世話」をする、「農の守りびと」なのだと気づかされました。これらの「お土産」を胸に、私自身も「道楽」と「パッション」を大切にしながら、自分なりの「守りかた」を模索していきたいと考えています。

最後に、このような貴重な機会をつくってくださった、つむぎと実行委員会の皆さま、そしてご一緒させていただいた登壇者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

ドワイヤー はづき

まさに「未来を耕す」多様な人々であふれかえったシンポジウムの会場でした。日々、私たちの頭のどこかで気になっている食や地域のこと、そして農に関しての世界の現状や南丹市を含めた日本各地の農村の今について、映画の中のお百姓の方たちや当日集ってくださった多様な登壇者の方たちがそれぞれの思いの詰まった言葉をつむいで伝えてくださいました。

提示された多くの課題も、それらに取り組む実践を基にしたヒントも、必要なところで根をはり、また先へ進む道にしていくなかには、あの場を共有できた私たちがそれぞれの立場で「耕す人」になっていくしかないのだと思います。

先が見えないことや課題が大きすぎて途方に暮れてしまいそうな不安を抱きながらも、大切にしたいものにつながり、対話を積み重ねていくこと。「間違い」と見えるものも、見方を変えれば「違い」でしかなく、多様な違いの中で「共通の利益」を見だし、協働できるかどうか。温度の違いがなければ風は吹きません。しっかりと根をはるには風も必要だといいます。風をうみ、土をつくり、種を蒔き、根をはる…丁寧に繰り返しながら少しずつ、皆さんと一緒に進んでいきたいと思っています。ありがとうございました。

鈴木 健太郎

過疎化による農業の担い手不足の問題を考えたとき、農業法人を立ち上げて経営的にある程度の規模を持つことで農地の活用や雇用の創出を狙うことは一つの正解だと言える。ただ、正解は必ずしも一つではなく、このシンポジウムの狙いはまさにその多様な正解があることを浮き彫りにし、様々な価値観の人達に多面的な視点を持ってもらうことにある。

大規模化、効率化が一つの正解である中、それが唯一であると思いがちなマスに対して小さな農を志す者は対抗意識を持つ傾向がある。そんな中、分科会1でご登壇いただいた株式会社京八さんは、規模拡大をしつつも地域活性化に真剣に取り組み、大規模効率化と地域貢献の両立の可能性を示してくれている。農村RMO摩気の西村さんは集落営農の在り方や多才な移住者の可能性に目を向けて、地元と移住者が最大限能力を発揮できる地盤づくりをされている。移住者と地元が見ている地域像は往々にしてかけ離れていることが多いが、その認識のズレを埋めることで、これからの地域を考える上での新しい共通意識のようなものが醸成されているようで、今後目が見えぬ。

そんな2つの事例紹介をもとに地域で実際に起こっている変革を感じてもらうことが分科会1の狙いだった。この二つの事例を受けて、南丹市副市長の山内さん、そして明治国際医療大学の新学部を担う秋津さんがそれぞれの立場での未来像を提示していただいた。不確定要素が多い分科会ではあったが、南丹市の「農×地域」の現時点をある程度浮き彫りにできたのではないかなと思う。

このような場で感じたこと、考えたことは、忙しい日常に戻れば時と共に薄れてしまう。年に一回のシンポジウムで終わらせず、今後は定期的に多様な価値観を持つ人たちが地域の農について交流し議論する場を企画していきたい。

東 愛子さん

全体会・パネルディスカッションから、食や農において、農法や地域間でのつながりを重要視する考え方が大切だと学びました。より良い農が、より良い社会をつくっていくという考え方も、現代社会に必要な事だと感じました。従来の農法を継承することと、有機農業を広めていくことは、どちらも大切だと思いました。

シンポジウム全体を通して、皆さんが他の方々とのつながりを大切にしながら参加しているという印象がありました。つながるマルシェでは、お客さんが農家さんとのコミュニケーションを楽しんでいました。このシンポジウムは南丹市の魅力があふれた素敵なイベントだと思いました。もし南丹市で何らかのプロジェクトをするとしたら、私は南丹市で農家さんが収穫した野菜や果物を持ち寄って、料理をするという会を開きたいです。南丹市では、農薬や添加物を使わない野菜や商品が作られているので、素敵な料理ができるのではないかと思います。食や農について情報交換をし、農家さん同士の繋がりが強くなっていけば、南丹市がより明るくなると思います。工夫が必要ですが、南丹市が更に素敵な場所になればいいなと感じます。

林 涼太郎さん

映画では、様々な農家の方の声が取り上げられていてどれも興味深かった。特に秋田県大潟村で大規模な開墾をした直後に減反政策が行われたという話が心にきた。県や国からの直接的な援助も受けられず、自害する人も現れる中での自主農業を強いられた環境であったのに、「米ぬか」を肥料として利用するといった残された住民の農業に対する真摯さや向上心にとっても感銘を受けた。

農村の課題として、生産者が販売者や消費者とのつながりが無いとされていたが、やはりマルシェや直売所はよい策なのではないかと感じた。生産者の顔を見て消費者も安心して買いやすく、直接的なコミュニケーションの場所を提供することができるいい機会になったのではないかと感じた。

もし自分が南丹市でプロジェクトをするならば、南丹市を周知してもらいイベントを大学でも行えたらと考える。内容としては南丹でとれた食材を使った物販や農業体験を展示するワークショップを開催できたらと考える。また、一回のみならず開催できるようにアンケートの実施をし、次回開催に向けての改善案などにもできればと考える。実現の兆しがあるのならば尽力できればと考える。

油谷 寛人さん

農業に関わる人は農家だけでなく市や地域の教育機関、NPOなどさまざまであると実際に見て感じた。その中で、それぞれが別の立場から自分の考えを出してみんなが討論できるシンポジウムがあって、南丹市はとても地域の繋がりを大切にしていると感じた。また、大学教授の話や、農家のドキュメンタリー映画に出てきた農の知識などさまざまなことを初めて知れる機会となった。

南丹市で個人が農業プロジェクトをするなら、小規模ながら地域資源を活かした特色ある農業に取り組む。例えば、有機農業や自然栽培に特化し、地元の直売所やネット販売を活用してこだわりの農産物を販売する。南丹市の豊かな自然環境を活かし、観光農園や農業体験イベントを開催すれば、都市部の消費者とのつながりを作りながら収益を上げることもできる。



また、耕作放棄地を活用して新たな農地を開拓し、地域の高齢農家と連携しながら農業の技術を学ぶのも一つの方法だ。こういった講演会のようなイベントから繋がりができ自分でもプロジェクトを出来るような環境に行けたら良い。

8. 学生からの声



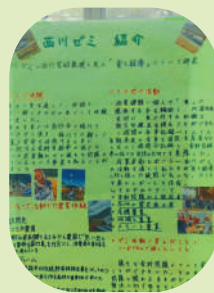
第1回目のシンポジウムで基調講演を頂いた龍谷大学の西川芳昭教授(農業・資源経済学/国際学)のゼミ学生たちが今回、学生ボランティアとして参加してくださいました。当日は、運営の手伝いをしながら、映画鑑賞、全体会、分科会に参加し、学びの時間を持ちました。学生からのレポートを紹介します。

西川ゼミの学生たちは、初年度のシンポジウム以降、農村資源フィールドワークとして、田植えや稲刈り、田畑用の水路巡りなどで度々南丹市を訪れ、学びと交流を重ねています。南丹市朝市マップの作成に取り組んだり、都市農村交流の研究として南丹市の事例を取り上げた学生もあり、今後も継続した関わりを期待したいと思います。

伊藤 駿さん

全体会・パネルディスカッションから得たことは、事前知識として知っていた農業の担い手不足が問題となっていること、循環型農業の起点となるようなブランド化を進める必要があることなどである。特に、実際に南丹市で農業に関連する方々の意見には、昔からの農法、地域や風景をつないでいきたいというものが多く、そのために「根をはる」「つながる」など農を始めやすい環境づくりをすることが必要だという意見はこれからの農をつなぐという点で参考になった。

シンポジウムは、自分が参加する前に考えていたよりも多くの人数が参加していて驚いた。全体会では南丹市での農村としての課題がどのようなものなのか、また農村や農法をどのようにつないでいくのか、大学に新たに農学部を設立することでの地域おこしなど、様々な内容を聞くことができた。分科会ではより詳しく農村と企業や大学などとの関わりについてお話を聞くことができたが、参加したどちらも盛り上がり農村のこれからをつないでいくことへの意識の高さを感じる事ができた。



三本木 亮齊さん

現在農地を手放す人が後をたたなくなり、続けている人に土地が偏るため大きな農家が増えている現状がある。そして政府もピックファームを推進していることもあるが利益を考えると多くの土地をもち運営することは必ずしも大きな利益になることはないことを映画を見て知りました。また、農業の効率化が進むにつれさまざまな技術が開発されて行く中で、田んぼを耕すのにAIを利用する技術では現段階では人の力で作業したほうが効率であり田んぼの状況により対応できるため実用化に時間がかかるという現状もあることを知れた。

秋津さんがおっしゃっていたUPF(超加工食品)は生活習慣病の原因でもあるため、地域から食を基に変えていくことでよりよい農がよりよい社会をつくるということが今の世界に大事な部分であると共感して印象に残った。また、「つながる」農家のため込んだ知恵や経験と科学的な研究をつなぐことが大事であることや、「根をはる」では誰でも農業が始めやすい南丹市の根として考えていることが印象に残った。

つながるマルシェ

このシンポジウムでの初めての試みとして、「農」に関するこの地域ならではのモノ・ヒト・コトにつながる場を設けよう、と広く南丹地域で活躍している作り手の方々に出店してもらい「つながるマルシェ」を開催しました。この地域の新たな魅力を発見し、出会いの場となるよう、また、農×地域というテーマを深掘りできるよう、「農」に何らかの形で携わりがあるという参加条件のもと、合計29店舗が集まってくれました。

当日のマルシェ会場には、店主が育てた米や野菜が原料の食べ物や飲み物であったり、すべての行程が丁寧な手仕事であるがゆえにその仕込み話も聞くことができる加工品、また、獣害対策相談や農場研修生募集コーナー、有機専門の肥料や書籍などが一堂に会しました。

農薬不使用の農産物や加工品を扱う店舗が多く集まった事がこの場の特色でもあり、他にはない充実した構成となったように思います。マルシェを目指してきてくださった方も多く、品物を手に店主と話が弾む場面や、出店者同士も交流する場面がみられ、会場はにぎわいあふれていました。「ここから新たな何かが始まる」そんな期待を感じさせる場となりました。

出店者一覧

地域で作られた素材を使ったお弁当・加工品

古民家食処「美・火水」:自然農法の野菜を使ったお弁当
 パン工房 農・みのり・:天然酵母パン
 カフェ&マルシェSEEDS :サンドイッチ/マフィン/パン
 OYAMAのおやつ :季節の焼き菓子
 美山のこむすび :おむすび/からあげ弁当
 ニジサク農園 :けんちゃんお米麺うどん
 AOISARU:ヴィーガンお弁当/米粉焼き菓子
 MOKU :コロッケなど
 ひざのうえにばん:米粉パン/米粉焼き菓子
 世屋蔵:無農薬米粉のお菓子/無農薬みそ/麹調味料など
 種:玄米おはぎ
 風気庵 :はちみつ
 青柳 :野菜の販売
 いけじゅう :ハンバーグ弁当
 ココペリハウス :焼き菓子/干し芋/味噌など
 里のごほうび みやま堂:鹿メンチカツ弁当など
 PIKANCHI:自然栽培赤米玄米珈琲/農産物加工品
 南丹農産加工クラブ:自然栽培柚のゆずこしょう



食とつながる 地域とつながる 作り手とつながる



「農」につながる情報交換・交流・書籍など

明治国際医療大学 :2027年開設予定の農学系新学部の紹介
 大和肥料株式会社:有機肥料のサンプル展示販売/肥料資材の紹介
 よつば農産 :よつばの紹介/取り扱い商品販売
 12歳の竹細工:タガ編みを使った小物ワークショップ
 (一社)農山漁村文化協会:農関連書籍の販売
 たねの交換会:自家採取した種を持ち寄って交換しましょう!
 使い捨て時代を考える会 :取り組み紹介/「安全農産」取り扱い商品販売
 キンカントマト物語 :キンカントマト冊子販売/YARDREED野菜研究所研修生募集
 南丹市 :南丹市の農や地域での様々な取り組み、移住定住促進サポート等の紹介
 野生動物被害対策相談室 :獣害対策アドバイス/ニホンザル被害への対策など
 NPO法人つむぎ:農×移住相談デスク

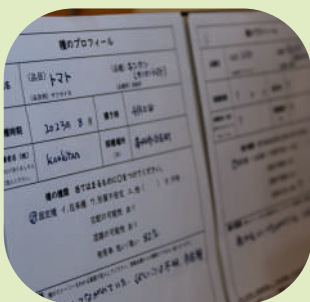
10. たねの交換会

たねの交換会は、自分で育てた野菜などを種になるまで育て、種取りをする、いわゆる”自家採取”の種を持ち寄り、交換する場です。なかなか交流することがない地方各地の農村の人たちが集まり、よりよい種を交換し、広めていくことで、農村や農業の発展をしていこうと明治時代にはじまったそうです。

地域の気候風土に合った種は、その土地ならではの食文化にもつながっていたり、同じ品種でも、ある地域で育った種が、別の地域にはなかった”強さ”をもっていたり・・・

個々でそれぞれに継いできた種を交換する、という中には土地に根付いた独自のものを守るといことや多様性を守るといことなど、重要な役割があるといわれています。

昔は普通にされてきたことですが、現在では種取りをしている人は本当に少なくなっているということから、このシンポジウムでは、食べ物を作る基本のところにある種取りに興味をもってもらふことや、周辺地域でどのくらいの人々がどんな種取りをしているのかを知りたい、ということで行なうマルシェの会場内でたねの交換会を実施しました。



会場には地元の農家さんや、長年種取りをしているという方もお越しいただき、最終的に計20種類以上の種が集まりました。種を持ってきてくれた理由とは・・・

- ・周辺地域の農家さんとの交流が欲しかったから
- ・万が一全て収穫して種がとれなかった場合、種を継いでくれている人がいるとまた分けてもらうことができるから
- ・楽しそうだったから
- ・長年育てている種をお裾分けしたかったから

など様々。中には「たねの交換会には興味があったけど南丹市外での開催が多く今まで参加できなかった。今回初めての参加となるのでとても楽しみにしていた。」「家庭菜園ほどの畑なので普段他の農家さんとの交流がなく孤独だった。今回種を通して関わりを持てて嬉しい」などの感想も。専業農家さんから家庭菜園をされている方まで幅広い交流が生まれている様子が見られました。

予想以上の数と種類の種たちと、楽しそうに種のお話をする面々。地域を想う気持ちやタネトリビトの熱い思いが集まった場となりました。

11. アンケート集計

シンポジウムご参加いただいた方のうち、47名の方から紙面およびオンラインでアンケートのご回答をいただきました。以下は項目ごとの集計です。

質問①ご参加のきっかけは何ですか。(複数回答可)

- 地域の課題に関心がある…26
- 地域の課題に取り組んでいる…21
- 映画「百姓の百の声」を見たかったから…23
- 農業に携わっている…19
- 明治国際医療大学の新学部について関心がある…13
- 南丹市への移住を検討しており、情報を得たかった…0
- 農や地域のことに関心を持っている人たちと知り合いになりたかった…12

その他…5

- ・新しいキーワードをみつきたい
- ・自治会組織
- ・多文化共生社会の実現、日本語支援
- ・仕事でも地域活動のサポートを行っており、農業とは切っても切れない関係にあるので
- ・胡麻まちづくり協議会員

質問②それぞれの満足度について、該当するものに○をご記入ください。

	非常に満足	満足	満足しなかった	不満	不参加
映画「百姓の百の声」	28	10	0	1	2
全体会	8	27	3	0	1
参加した分科会	8	22	1	0	0
マルシェ	8	22	3	1	2
シンポジウム全体	10	22	0	0	0

11. アンケート集計 (つづき)

質問③映画「百姓の百の声」の感想をお聞かせください。

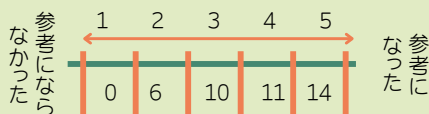
- ・観終わってから良い意味でもややとした気持ちになりました。何か答えが得られるというより対話が始まる映画だと思いました。
- ・道楽に！！記録をとる、常に新しいことに挑戦する。
- ・長かったです。よい力が感じられました。
- ・百姓がみんなかっこよかった。IIも楽しみです。
- ・現在農業が取り込まれている環境は厳しく課題が多い。現場ではどのような声があるのか知ることができて面白かった。
- ・農家、百姓の徹底した生の声を拾っておられる内容に感動と気づきがいっぱいありました。よかったです。
- ・2回目ですが、1回目より印象深かった。百姓をなめるな、本当にそうですね。農文協すごい。
- ・ずっと見てみたいと思っていた映画だったのでこの機会に見ることができてよかったです。また、監督さんも素敵な方でお話伺えて来てよかったなと思いました。次の映画も楽しみです！
- ・農家としての視点で見ると改めて結局はロボットやAIが発達してもそれぞれ人間の手のかけ方が何よりも大切だと感じました。映画に出てくる各農家さんの信念が伝わってきてとても感動しました。やっぱり1から食べ物を生み出す農業という仕事はかっこいいなぁと誇りに思えました。
- ・現状の課題のほとんどは現場、そこにかかわる人、つながり、百姓目線、現場目線の現実を伝える、そのままわかりやすく伝える映画でとても素晴らしい内容にまともについて参考になりました。政府や今の政治はその邪魔をしないでいただきたいと思いました。
- ・以前から興味のある映画でした。監督の話も聞けて良かったです。ナレーターの言葉一つ一つ、たねの写真に魅了されました。百姓は百の仕事ができる人、すごいですね。
- ・農を大切にしたいと思った。
- ・長年やってこられた気付きのお話は説得力があった。
- ・何度でも見たいと思う素晴らしい映画でした。映像が美しく涙が出るほど感動しました。
- ・エモーショナルですね

(P9に掲載以外の感想を以下に掲載します)

- ・いろんな考え方があってよいと改めて思いました。とても素敵な映画、ありがとうございました。
- ・いろいろな発見があり面白かった(ぬか、えひめAI、苗など)
- ・農文協の組織、活動を始めて知りました。
- ・作物を作ることだけでなく、基本である「草刈り」のことも取り上げてもらいたいと思った。獣害についても取り上げてほしい。
- ・自分と比べると残念ながらレベルが高く、比べるには遠い感だ。
- ・新たな発見、気づきがあって大変良かったです。まだまだ深堀する点がたくさんあるので、次回編、さらなる続編に期待しています。小さな農家へのアプローチに愛があふれている。
- ・日本の農業に関する生の声が聴けたよい映画でした。
- ・映画は途中までしか見られなかったので、また見る機会があれば必ずすべて見たいです。
- ・百姓の方々の生の声を聴けてすごくよかったです。
- ・農の枠を超えて地域福祉など非常に学び多い素晴らしい映画だった。小学生はむずかしいかもしれないが、中・高校生にも見てもらいたい(学校で上映会をやしてほしい)
- ・130分はとても長い映画でした。ドキュメンタリー映画なので2部にして休憩時間をとってほしかった。集中力が持続しにくいのと、トイレの近い人もつらかったのでは・・・
- ・もっといろいろな声が聴きたかったです。「続編」を期待しています。
- ・内容は良かった。個人だけでなく地域の在り方についても対象にしてほしい。
- ・何度見ても心が動きます。昨年春に見て登場人物の方に出会うことができその方の生き方を勉強させていただくことができ、希望が湧いたことを思い出しました。
- ・前回十三で見ましたが、さらに編集が加わっていてとてもフレッシュで、それぞれの農家さんの個性に農家力を感じるとともに、百姓のほこりを感じ、改めて田畑に向き合おうとパワーをいただきました。

質問④シンポジウムの内容についてお聞かせください。

A. テーマに関連して課題だと思われることやご自身の取り組みなどに参考になりましたか。



B. テーマに関連して課題だと思われることは何ですか。また何か取り組みをされていたら教えてください。

- ・楽しい、興味があれば始められると思います。食への正しい知識が消費者に伝わればと思います。
- ・いかに無農薬でたくさん作るか。
- ・これは難しい問題だと自分が思い込んでいることが課題かも。
- ・「根をはりつながら」人間中心に何と何がつながり、それは何が必要なのかといった根本的なお話が聞きたかった。そのために南丹市が抱える「強み」や「弱み」を具体的に聞いた後、そのためにどのようにすればよいかを人間中心にお話を聞きたかったです。
- ・地域の小さな農業者を増やしたい。自立・自律しながら助け合えるゆるやかな、確かなコミュニティーが必要と思うのでそれを作りつつ。幸せを感じながら生きる人を増やしたい。

質問④B続き

- ・南丹市民の中でも農と地域の結びつきが遠い部分がある
- ・地域では高齢化が進み、あと5年たったらどうなるだろうという話が話題になる。中山間地なので、急斜面の草刈りが問題。そういうことも取り上げてほしい。
- ・一般の人と農家の現実があまりにも大きいこと（理解できないと思う）。
- ・農産物の価値があまりにも低いこと
- ・農産地域の高齢化に伴う農業の継続が課題。
- ・協働（CSA等）、お金以外の地域価値を増やす、若者が移住できるには。
- ・収益を出すこと
- ・農に関わりたい人の発掘、小農をやりたい人と休耕地のマッチング
- ・私は3年前に移住をしてようやく貸家から自分の家を手に入れた。春から農地を耕す予定ですが、地域にいて地域で暮らすこと、田畑に取り組むことと収入を保持していくことは今ちょっと難しいかなと思っています。農の知識がないこと、道具がないこと、1人でできるのか、などなど。
- ・食と農の重要性は日々感じています。これからの時代に土に触れる重要性を知っていただくために田畑を使って土に触れる機会を設け、旬の野菜や野草のおいしさを知っていただける機会を年に数回実施しています。

質問④C. 全体会、分科会で印象に残ったこと、学んだことなどをお聞かせください。

- ・農業の大切さを感じた。できることから始めたいと思いました。
- ・今後の学部新設を機に、未来に提言しつつ切り込んでいける力を期待します。
- ・実際に農業をされている方のお話がきけて良かった。
- ・様々な農家さんの直接的な考え方がきけて良かった。特に堀さんのお話をもっともっと聞きたいと思いました。ここからさらに生産者、消費者の垣根を超えた話も深めたいと思います。
- ・お話全部面白かったです。日々考えていたことを別の視点から見られたように思います。
- ・百姓交流会について
- ・堀さんの挨拶、自分の食べるものを自分で作る、南丹市の発信、副市長さんの敷居が低く、熱く農と地域づくりを語る姿、谷口さんのしっかりした思いを伝える事、有機農業学部ができるというブランディング、地域づくりつなぎにしていけること。監督の笑顔がとても素敵でした。ほっこり温まります。会えてよかった。
- ・「しなければならない」よりも「～したい」を大切に。対話することでしか発展しないし答えはない。
- ・行政を頼れないと、現実を知らないんだなぁと改めて思いました。
- ・兵庫県から来ましたがこの地域も同じで担い手不足、獣害などの問題があると思いました、私は農家ではなく、家族で食べる分だけの畑と田んぼをしています。その点でドワイヤーさんの話はとても参考になりました。
- ・農で地域がつながること、いろいろなお話がきけてとても良かったです。人とつながりながら対話が大事、農地（地球）は未来から借りていると信念を持って語られていて、その通りだなぁと実感しました。
- ・パッションに導かれて生きます！
- ・いろいろな各分野の方のお話を聞かせてもらいありがとうございました。農業立国に向けて明治国際医療大学が有機農業のセンター的存在になることを期待します。
- ・農業は風景を守ることにつながる
- ・地域と消費者等々の対話がもっと必要だと感じた。

- ・テーマに関連しているかどうか分かりませんし、これは農に関してだけではありませんが、いろんな法律があり、それぞれの法律は問題点があり、これを整理しないままここまで来てしまったことが大きな課題だと思っています。今やっているのはささやかですが、どんな法律や制度がありそれがどんな考え方で作られたのかを学び始めています。
- ・今一番気になるのは少子化だ。それと仕事場。これを解消するためにも残されている農地の利用拡大だ。個人個人では無理だろう。この解消のためにはグループ化しかないのでは。その口切としても現活動は大切なことだと思います。
- ・つむぎのはづきさんが自己紹介で話されたことは全く私が今思っていること、願っていることと同じでした。私もできることを頑張ろうと思いました。
- ・苦しんでいる時の他者への発信、人とのつながり、農家と外から来た非農家はお互いを認める事から始めなければならないが一長一短にはできない。
- ・獣害と自分のモチベーション維持
- ・始め易さは大切な要素だと思います。
- ・地域での情報共有を大切にする



- ・分科会②で登壇された方々、すごい方々だと感じた。まだ若い人たちが頼もしい方々だ。今後も交流の場を作り、仲間を広げてほしいものです。
- ・副市長さんが出席され、取り組みを話されたことに関心しました。市全体が農の取り組みについて力を入れているさまがよく判った。
- ・映画からもつながるが先人の人たちが持っている大いなる遺産を何とか次につないでいきたい。
- ・小さい種を蒔いて、それが大きく育ち、野菜が育ち実ることはすごいことなんだと知らない人が体験することの魅力はとても大きい。「お客さんの顔を見て声を聴いて農業することがだいご味」印象に残る表現でした。
- ・農家力、百姓力、地道な取り組みを継続していくこと
- ・南丹（地元）の参加者が多いことが印象的だった
- ・印象に残ったこと、学んだことは複数ありました。答えになっていなくてすいません。ありがとうございました。
- ・担い手、根をはる、がキーワードになりました。
- ・都会や地域外の人とのことは取り組んでいます、高齢者ばかりの地域の皆さんとともに月一回程度食事会を自分たちの地域で収穫できる野菜を使い、地域のおばちゃんたちで作ることができれば雇用につながるような環境を整えていきたい。地域の活性化につなげたい。
- ・映画の中で出てきたセリフで「自分は道楽として農業をやっている」や、ドワイヤーはづきさんが言われた「パッションに従う」、これは自分の生き方は自分で選んだ、自分の生き方の席には自分でとる、という宣言のように聞こえてとても印象に残りました。
- ・ヒトのつながりを大切に！
- ・久しぶりにシンポジウムのものに参加させていただいて、あまり変化点がないのかなと感じた。またその中でじわじわと人口減という大きな課題が近づいているなと思いました。
- ・とてもおもしろくて、1日楽しませていただきました。考え続けることの大切さを学びました。

未来を耕す
～根をはり つながる 道づくり～

質問⑤この農×地域シンポジウムの企画で、今後どのようなものがあるかといと思いますか。(複数回答可)

- 1.農業を始めたい人や移住希望者と各地域のマッチングの場…19
- 2.テーマに関連した活動や地域の視察&体験ツアー…16
- 3.移住者や担い手を積極的に呼び込みたい地域の連携づくりの場…17
- 4.農×地域をテーマに南丹市を外にアピールするイベント…12(農産物、特産品、移住促進など)

5.その他…7

- ・テーマに沿ったお祭りを作る
- ・ぜひ、地元農業系高校生も参加してほしい。明治国際大も農学部を超えて鍼灸学部、看護学部とも連携して、地域のサロンなどと交流できればと思った。
- ・地産地消の好循環を目指す工夫
- ・つむぎさんがこの数年をかけて着実に取り組んでこられたことの継続の力と時代が変化してきていることがうまく交わっていることは素晴らしいですね。上記の内容はぜひお願いしたいです。

- ・地元の人同士をつなぐ取り組みの参考例。明治国際医療大学新学部の実践報告会
- ・南丹市参農サポートセンターがあることを初めて知った。大いに活用 すべきですね。
- ・柴田監督の「森聞き」という画を10年前に見ました。この映画もとても良いので上映してほしいです。農家でもない人、一派市民向けの(亀岡市でも県外者でも)南丹市で余っている田んぼで米作りを学び、家庭菜園のようにグループで助け合いながら学びの後も続けて自分の食べるコメを作れる取り組みがあればよい。

質問⑥シンポジウムの運営に関する次の項目について、どのくらい満足されましたか。該当するものに○をご記入ください。

	非常に 不満 1	2	3	4	非常に 満足 5
日程	0	1	11	9	16
会場	0	1	12	8	16
事前案内	0	0	12	12	13
申込方法	0	3	12	11	11



質問⑦その他、全体を通してのご感想などありましたらご自由にご記入ください。

- ・これだけのシンポジウムを行政、大学、市民と協働で開催するのはすごいと思いました。普段から良いコミュニケーションが取れているのだと思いました。
- ・農地が崩れていく、崩されていく、圃場整備や太陽光パネルの問題→離農を加速させる要因になっている
- ・映画に出てこられた方々や南丹エリアでの農家さんたちの生の声を聞けてとても良かったと思います。今、野菜が高騰と言われますし、お米も。お金を出して買えなくなることだってあるかもしれません。夏の暑さや冬の寒波、等々、現在のきちんとした現状や副市長さんが言われた農家が持続できるような収入を皆それぞれ頑張っている今ですが、やめられる方々(年齢等もあると思いますがその他も)がおられる今。正しく理解し、見えていない部分をしっかり見つめ、何が今必要なのか、何ができるのか、自分自身でも見直す良いきっかけとなりました。準備等々ありがとうございました。また会場でも素敵なご縁をつながせていただいたこと、感謝いたします。
- ・地域のことを(今後の)どう考え盛り上げていくか、数々のヒントがありますが、具体的に動かしていくことの指針を得たいです。今後も課題です。
- ・駐車場からの階段の移動は困難と感じる方もいると思う。会場へのアクセスも大きな課題とか考える。
- ・食べる人が切り離されている農の問題は大きいと思います。食べる人の意識改革、大事ですね。
- ・これだけ多くの人々がこれだけ熱心に参加されている事実。これでだけで何か未来に期待が持てそうな気がしました。ありがとうございました。あと改めて「農文協」さんのすごさを感じました。
- ・胡麻地域街づくり協議会がありますが、今後いろんなグループとの交流を考え、お互いに活動拡大に考えます。その時はよろしくお願いします。

- ・田舎のおっちゃんたちの地域愛はとても素晴らしいと日々実感しています。それを支えるのは食だと考えています。地域のおばちゃんたちが意識が高まるようにつながりを大切にしていくことで、地域のつながりが関係性がまるくつながってきた様に、先人たちのような村づくりを継続していきたい。食と農は切っても切れません。若い人の色が乱れております。大学でも安全安心な食材を使ったお昼を提供したいと思います。
- ・地域で何代も農業を営む人と、移住で就農の人の両方の本音を聞くことができ、語り合うことでこれから共鳴し合いながら農村を維持していけることは素晴らしい。有機、無農薬の農業に対して以前ほど地域の無理解は薄くなり、今がチャンスである！と言われたことは印象的でした。
- ・屋内でのマルシェでよかった。農家の方の話を直接聞けて学ぶことが多かったです。
- ・お試し農家(住宅、2年間限定で貸す)/都会と農村・後継者育成(小学校のカリキュラムに1次産業を)/農業作物の価格をもっと上げる→農家が経済的に成り立つ。
- ・生産者のお話がきけるのは嬉しいです。亀岡市ですが、農家でもないですが、南丹市が好きです。南丹市に移住したいです。
- ・第1目的の種の交換会に参加できてよかったです。タネトリ仲間と交流したいです。有機農業というか、今まで農としてあまり認められていなかったもの、作物をつくるだけでなく、周りの人々、取り巻く環境までを知り、ともに生きてゆきたいなことが大切だと思っています。今回のイベント、スプリング日吉でたまたまチラシを見つけて、久しぶりにわくわくしました。希望が見えました！
- ・とても素敵な空気でした。今後ともよろしくお願いします。
- ・本日の参加者に農に関心のある方が多く、移住を含め農業につながるようになればと思います。

終わりに

「有機農業の集まり?」「農家じゃないけど行っていいの?」「一体どんな人が集まるの?」・・・このシンポジウムに参加されるまで、皆さんには、多くの「?」があふれていたと思います。私たち実行委員自身も「映画に人は集まるのか?」「私たちは一体何を伝えたいのか?何ができるのか?」「何のためにシンポジウムを行うのか?」と、「?」にあふれたスタートの中から議論と対話を重ねて内容を作り上げてきました。

この冊子の原稿を書いてくださった登壇者やアンケートを寄せて下さった参加者の皆さまが書かれているように、南丹市だけではなく、現在の日本の多くの中山間地域における問題を解決し、「持続可能」な「農」と「地域」を作っていくためには、一つの方法や一つの考えでは立ち行かなくなっている現実があります。そのため、さまざまな方法、さまざまな規模、さまざまな年代の方が参加しての農の営みが必要であり、作り手である農家だけではなく、消費者も農と食について「自分の生命をつないでいくもの」として捉え参画していくことが重要だということを、このシンポジウムを通して確かめ合うことができました。

英語の「culture(文化)」は、「耕す」という意味のラテン語に由来しています。私たちが「農」についての考えや意見を交流し、お互いを認め合いながら「未来を耕す」とことは、地域の文化をつなげていくことだとも言えます。

1年目「これからの農と地域を考える」、2年目「種まきミーティング」、3年目「根をはり つながる 道づくり」・・・今年度のシンポジウムでは、大学との協働、マルシェ、映画上映、地元の若手農家さん、タネの交換会・・・と、多くの新たな道を拓くことができました。このように、さまざまな道を作ることができたのは、皆さまからの温かいご協力・ご支援をいただいたおかげだと心より感謝しております。

会場を提供してくださった明治国際医療大学さま、それぞれの日頃の取組や今後の展望を力強く語ってくださった登壇者の皆さま、多くの人と人とのつながりを作ってくださったマルシェ出店者の皆さま、当日の運営を支えて下さった・南丹市職員、運営サポーター、明治国際医療大学・龍谷大学の学生ボランティアの皆さま、そして、積極的な参加をいただいた参加者の皆さま、本当にありがとうございました。改めて御礼申し上げます。

今後も、皆さまの前に続いている道を一緒に歩み、未来へ向けてつなげていきましょう。

(特非)つむぎ・農×地域シンポジウム実行委員会 一同

関係者の紹介

運営にご協力いただいた皆さま

※あいうえお順

明治国際医療大学 事務局の皆様

明治国際医療大学 看護学部 看護学科

<学生ボランティア> 薄衣 愛香 さん 大槻 華翔 さん

龍谷大学 経済学部 農業・資源経済学ゼミ

<担当教授> 西川 芳昭 さん

<学生ボランティア>

東 愛子 さん 伊藤 駿 さん 鈴木 冴月 さん 三本木 晃斉 さん

奈良崎 蓮 さん 林 涼太郎 さん 油谷 寛人 さん

プロダクション・エイシア

大兼久 由美 さん

司会

コイケダカオ さん

メディア・記録

田中 利彦 さん

運営サポート

明田 泰史 さん 井筒 由紀 さん 榎本 拓司 さん 田畑 昇悟 さん

西澤 雅子 さん 安原 正子 さん 矢野 大輔 さん

託児

NPO法人グローアップ

チラシ・ポスター デザイン&イラスト

uma studio

農×地域シンポジウム実行委員会

牛尾 直美 榎本 聡子 奥村 育子 塩貝 孝之 鈴木 健太郎 高屋 皓

友前 尚子 ドワイヤー はづき 中野 修 藤原 正昭 堀 悦雄

前田 敦子 安原 健二 米澤 弥央



農 × 地域シンポジウム 2025

未来を耕す

～根をはり つながる 道づくり～

午前の部

ドキュメンタリー映画
「百姓の百の声」上映

つながるマルシェ

午後の部

全体会 パネルディスカッション
「根をはり つながる 道づくり」

分科会

- ①「農と地域のこれから」
- ②「百姓のナマの声」

詳細は
裏面へ

豊かな森、田畑、里山の暮らしが息づくこの南丹。
5年後、10年後、そしてその先、
どんな風景にしていきたいですか。
地域の人も、移り住む人も、訪れる人たちも、
春を待つこの日、農と地域について一緒に考えてみませんか。

日時

2月15日 土

9:50 ~ 16:15 (開場 9:30)

参加費

前売り 1,500 円

2/12 (水) 締切

当日 2,000 円

学生無料

午後のみ参加 1,000 円

前売り購入

購入方法 ① Peatix
オンラインでお支払いの場合

購入方法 ② Googleフォーム
銀行口座にお振込みの場合

または nantanmiraitagayasu@gmail.com に
お名前とご連絡先を送信してください。



会場・アクセス

明治国際医療大学

講堂、10号館

京都府南丹市日吉町保野田ヒノ谷 6-1

駐車場：あり（無料）

JR 山陰線「鍼灸大学前」駅徒歩 10 分

※電車の本数が限られています。

ご注意ください。

※「つながるマルシェ」では地元の食材を

使ったお弁当などを販売します。

昼食にご利用ください。

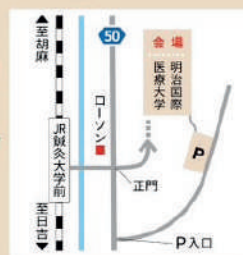
お問合せ

(特非) つむぎ・農 × 地域シンポジウム実行委員会

電話 0771-74-1327 / 090-3623-1828

E-mail nantanmiraitagayasu@gmail.com

HP <https://tsumugi-kyoto.net/>



主催：(特非) つむぎ・農 × 地域シンポジウム実行委員会 協賛：明治国際医療大学 後援：南丹市、京都新聞、コミュニティ・バンク京信
この事業は「令和 6 年度京都府地域交響プロジェクト交付金」を活用しています。

ドキュメンタリー映画上映 10:00~12:10
「百姓の百の声」 監督 柴田昌平
 製作・配給 プロダクション・エイシア



©プロダクション・エイシア

講 堂

食べている限り、
 誰の隣にも「農」はある。
 なのにどうして、
 これほど「農」の世界は
 私たちから遠いのか。
 これは自然と向き合い、
 作物を熟知する百姓たちの
 叡智を訪ねたドキュメンタリー。
 食卓の向こう側にいる
 「耕す人々」の世界の入り口が、
 ここにある。

映画「百姓の百の声」より

託児あり(要申込)

全体会 13:30~14:45

パネルディスカッション

「根をはり つながる 道づくり」

農と地域の「今」を様々な視点からとらえてみましょう。
 どんな道がみえてくるでしょうか。

登壇者 ※

秋津 元輝 さん (京都大学教授 / 食農社会学・食農倫理論
 明治国際医療大学新学部設置準備室長)

柴田 昌平 さん (ドキュメンタリー映画監督)

谷口 光里 さん (谷口農園)

山内 守 さん (南丹市副市長)

ドワイヤーはづき* (特定非営利活動法人つむぎ)

ファシリテーター

山本 奈美 さん (京都大学大学院農学研究科研究員 (非常勤)
 明治国際医療大学新学部設置準備室)

10号館
2 階

11:00~13:30

つながるマルシェ

農を軸に、新たな出逢いや発見が！
 この地域ならではの店が並びます！

10号館
1 階



出店内容はつむぎ HP にて随時公開▶



分科会 14:55~16:15

①「農と地域のこれから」

2027年4月、明治国際医療大学に日本初となる有機農業に特化した
 農学系新学部 (生態食農学部 (仮称・設置構想中)) が開設される予定
 です。地域の農業と大学、どのような展望が描けるでしょうか。

登壇者 ※

秋津 元輝 さん (京都大学教授 / 食農社会学・食農倫理論、
 明治国際医療大学新学部設置準備室長)

香川 賢人 さん (株式会社 京八 / 株式会社 京 Work 代表取締役)

西村 寿 さん (農村 RMO 厚気 副会長)

山内 守 さん (南丹市副市長)

ファシリテーター

鈴木 健太郎* (369 商店 / (一社) 京都オーガニックアクション代表)

10号館
3 階

分科会 14:55~16:15

②「百姓のナマの声」

多様な農家を訪ねてきた柴田監督を囲み、映画に一步
 踏み込んで、この地域の「声」をきいてみましょう。

登壇者 ※

柴田 昌平 さん (ドキュメンタリー映画監督)

下間 康広 さん (しもつま農園)

須賀 智昭 さん (農園 negu)

谷口 光里 さん (谷口農園)

堀 悦雄* (丹波ハッピー農園)

ファシリテーター

山本 奈美 さん

(京都大学大学院農学研究科研究員 (非常勤)、
 明治国際医療大学新学部設置準備室)

10号館
2 階

別会場 18:00~

農×地域交流会

会場 ひよしフォレストリゾート山の家

※送迎あり、宿泊できます。お問い合わせください。
 ※会費、宿泊費等は別途かかります。

※あいうえお順、
 ※は実行委員会メンバー

特定非営利活動法人つむぎ・農×地域シンポジウム実行委員会

E-mail : tsumugi.nantan@gmail.com

HP : <https://tsumugi-kyoto.net/>



この冊子はつむぎHPよりダウンロード（PDF）できます。



つむぎHP

この事業は「令和6年度京都府地域交響プロジェクト交付金」を活用しています。

